

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00401

研究課題名（和文）「おば」の介入と女性像の間世代的形成 19世紀アメリカ文学における領域批評の再考

研究課題名（英文）Republican Aunthood: Intergenerational Texts and the Separate Spheres Criticism in Nineteenth-Century American Women Writing

研究代表者

増田 久美子（Masuda, Kumiko）

立正大学・文学部・教授

研究者番号：80337617

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は19世紀アメリカ女性文学研究における「男女の領域分離」の妥当性を再考し、作品を「おば」（aunthood）という視座から検証することを目的とした。「完全な市民権」のない女性たちがいかに「市民」として行動し、自立した自己像を形成しうるのであるか。その過程に、姪（ないし「姪」に相当する人物）にたいする「おば」の介入の行為と影響力を見だし、その解釈の可能性を試みた。家庭における男性性（夫、兄弟、息子）から独立しつつ、完全に家族・親族関係から切り離されていない「おば」という女性性には、伝統的な共和国理念と女性市民性という新旧の価値観を姪の世代に伝える役割があったのではないかと考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の提唱する「おば」という新視点を導入することで19世紀の領域論を再考し、テキストにみる新しい女性の自己像および市民的行為の実現性を検証している。「おば」と姪のような多層的世代間にみられる価値観の継承と交流は、実母と実子に限定する近代的な養育のあり方に疑問を投げかけ、現代においても共有できる問題だと考えられる。さらに、これまでの二元論性や同時代世代の連関性を論じてきた領域論の限界点を取り払い、多層的な世代の交流を通じて捉えられるジェンダー思想を考察することにより、アメリカ女性文学研究に新しい領域批評の準拠枠を構築する可能性が模索された。

研究成果の概要（英文）：This research aims to assess the appropriateness of the "separate spheres" ideology in nineteenth-century American women's writing and examine their texts from a new perspective of "aunthood." It explores how a new generation of women in the mid-nineteenth century North could act as citizens and build an independent self-image without "full citizenship." In this process, the research identifies the actions and influence of the "aunt" on the niece (or a similar figure) and investigates the interpretive possibilities of the aunt-niece dynamics. The research suggests that a female personhood of "aunt," while independent from male figures in the household (husband, brothers, sons) yet not entirely detached from family and kinship ties, might have played a role in transmitting both traditional republican ideals and new values of women's citizenship to the "niece" generation.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：女性作家 ジェンダー 家庭性 アウントフッド

1. 研究開始当初の背景

(1) 19世紀アメリカ女性文学研究において、男女の活動領域を公私によって峻別する「男女の領域分離」は、当時のジェンダーシステムを評価する分析概念として、作品解釈にはきわめて有効であり続けた。しかし、1990年代末以降、その二元論的パラダイムへの率直な批判が高まっていくと、公私領域の二項対立構造を解体もしくは無効にすることが提起された。ジェンダーの問題のみならず、人種・階級・宗教・地域等のさまざまな要素が錯綜する関係性のなかに、19世紀アメリカ文学がおよぼす多様かつ複雑な文化・社会について理解しようとする取り組みが期待されるようになったのである (Davidson 1998; Davidson and Hatcher 2002)。本研究はそのような研究動向において、「おば」という女性性を新しい分析視座として導入し、文学テキストにおける「市民的行為」としての女性の公的行動、および、独立した女性像を解釈する可能性について検討するものとして開始された。

(2) 従来の研究では、女性たちの公的活動は道徳的責務を担う母親としての立場 (motherhood) や、女性どうしの連帯性 (sisterhood) といった文脈のなかで実現されたものと認識されており、また、女性の独立性や自立による自己実現の問題や表象は「独身女性であること」(spinsterhood)、すなわち非婚への決意を軸に議論されてきた (Chambers-Schiller 1984)。だが、現実の女性たちを実際の公的行動に駆り立てた要因として、文学テキストにみられる道徳的価値観 (家庭性や「感傷の力」等) を重視するのならば、その価値観を支える「おば」という人物の機能に注目しなくてはならない。テキストにおける「おば」とは、既婚・未婚にかかわらず、女性主人公の家庭形成を支援する先達として登場するが、その主人公の家庭内にいる夫・兄弟・息子といった男性性から距離をおき、女性の解放・独立性をも表象する存在でもあった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は19世紀アメリカの小説を中心とした個別のテキストから「おばであること」のイデオロギー性を抽出・分析し、テキストにおける「おば」の機能と意義について包括的な理解に到達することを目的とした。女性の自己実現や市民性をめぐる既存の研究は、白人中流階級家庭における母や妻 (あるいは、母や妻になると期待される若い女性) の連帯性と、(その対極に位置づけられる) 非婚を貫く独身女性を分析対象としてきたが、それらは同一世代 (共時的世代) における「領域」とジェンダーの構造分析に拘泥した。本研究はアメリカ独立革命期から継承される共和制イデオロギーの伝統とそのジェンダー思想を、「母」ではなく「おば」が「姪」(血縁にかかわらない若い女性および読者) に伝えるという多層的世代の構造によって、自立した女性市民という新たな女性像が形成されていく過程を明らかにする。

(2) 「おば」という新規の分析視座を導入することによって、これまでの二元論性や同時代世代の連関性を論じてきた領域論の限界点を取り払い、多層的な世代の交流を通じて捉えられるジェンダー思想の伝承およびその思想的変遷を論証しようとして試みている。したがって、アメリカ女性文学研究に新しい領域批評の準拠枠を構築しうることを目指した。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、1830年代から50年代に出版された家庭小説・感傷小説を対象とした。家庭管理に苦心する「姪」(若い女性主人公たち) がニューイングランド的な価値観をもつ「おば」の教えや指導を受け入れ、また、夫の主張する家事における効率性・商業的価値観を否定することによって、アンテベラム期の都市化した家庭空間のなかでどのように近代的女性像を確立していくのか、その過程を分析する。

(2) 「おば」は、都市化し激変する近代社会のなかで家庭の形成と運営にとまどう未熟な妻たち、あるいは結婚が未知数の姪たちに、共和国理念である市民性とニューイングランド地方の田園的な美德と人間性、そして、女性としての自立を教授する存在であることを分析する。「おば」が家庭管理に商業的な効率性を要求する男性とは異なり、若い女性たちに市民として行動することの意義を自覚させ、女性の家庭の役割を脱構築する契機を与えていく存在であることを論証できれば、「おば」の役割とはあらゆる女性を「良妻」や「賢母」に仕立てるのではなく、むしろ、世代を異にする若い女性たちに家庭から解放された新しい生き方を奨励するものとして解釈することができる。

4. 研究成果

(1) 「おば」の介入と「姪」世代にみる女性市民の形成を検証するにあたり、まずはアンテベラム期アメリカの「権利なき女性」の存在をどのように「市民」として位置づけられるかを検討し、「女性・市民社会・領域」に関する先行研究を精査した。「領域」の言説は当時の女性の生き方を制限しながらも、家庭の延長線上に女性的・道徳的家庭感をさまざまな社会問題に結びつける

ことで、公私のあいだに「もうひとつの公的空間」を構築した。女性が道徳的影響力を行使するという身ぶりは、女性の公的空間での行為を正当化する合理的説明として機能したのであるが、それは女性が慈善活動や社会改良運動等に従事する場でしかなく、さらに「市民社会」という概念を導入することで、たんなる「私的な家庭女性」を超えうる可能性を探る必要があった。ある定義によれば、市民社会とは女性たちの政治的主張と市民的行為が醸成される場であり、あらゆる言説の行き交う文化的領域であるが (Kelley 2006)。具体的事例は示されていない。そこで、「男女の領域分離」を提唱しつつ女性の向上を目指した人物であり、雑誌編集者として著名であったセアラ・ヘイル (Sarah Josepha Hale, 1788-1879) の自伝的テキストを取り上げることにした。領域論をめぐる言説に市民社会および女性市民の形成を読み込み、その結果、ヘイルの描く自画像のなかに「権利なき女性」が市民となりうる模範的モデルを提示したことが判明された。

(2) 引き続き、「権利なき女性」の市民性を検討するため、「女性・市民社会・領域」にかんする先行研究を精査した。しかし、このカテゴリーでの具体的な事例を見いだせなかったため、ここに「人種」を加えることになった。具体的には、黒人女性によるパフォーマンス的テキストとして、メアリ・ウェッブ (Mary E. Webb, 1828-1859) が演じた朗読劇『クリスチャン・スレイヴ』 (*The Christian Slave*, 1855) を取り上げた。これはハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe, 1811-1896) が自らの小説『アンクル・トム的小屋』を戯曲化した作品である。「おば」的なストウと「姪」的なウェッブの関係性において浮上したのは、「女性の領域」と「人種」をめぐる両者の思想的差異であった。ストウにとって戯曲テキストとその上演とは、黒人女性という主体に声を付与することで人種への寛容な態度を示しつつ、実際には自身が「真の女性らしさ」から逸脱することなく、つねにリスpekタブルな『アンクル・トム的小屋』の原作者であり続けるためのもくろみであったと考えられる。いっぽう、ウェッブによる『クリスチャン・スレイヴ』の朗読によって生じさせたテキストの意味とパフォーマンス的意義とは、ストウの企図をすり抜ける問題を含んでいた。ウェッブは領域を越境しないリスpekタブルな女性であることを示しながら、ひとり人間に生じる階級的・人種的横断を演じ、人種カテゴリーの流動性と作為性を提起したのである。

(3) 「共感」の作家として知られ、自身も非婚のおばであったキャサリン・マリア・セジウィック (Catharine Maria Sedgwick, 1789-1867) が人種的他者を描く (不) 可能性を検討した。まず、19 世紀アメリカにおける「共感」を定義し、次にセジウィックの人種的他者の表象をテーマとした先行研究を調査したうえで、セジウィックの「ニューイングランドの奴隷制」 (“*Slavery in New England*,” 1853) を分析した。なお本研究では、「共感」によって主体と対象の差異が崩壊することなく両者をつなぎ合わせ、対象 (他者) を政治的に抹消しない可能性を探るという視点を定めている。「ニューイングランドの奴隷制」は、セジウィック家に奉仕した黒人女性マムベット (Mumbet) こと、エリザベス・フリーマン (Elizabeth Freeman, c.1744-1829) の生涯に起こった4つの出来事を語るテキストとなっている。そのうちのひとつ、これまで看過されてきた「白人少女とマムベット」のテキストを対象とし、マムベットを「おば」と捉え、通常の共感のモデルとは異なる共感が表現されていることに着目した。通常、共感の身体的記号である「涕涙」は白人が不遇な黒人にたいして示すものとされているが、ここでは共感する主体 (黒人のマムベット) と対象 (白人の少女) の人種的転倒があり、また、他の白人登場人物と異なり、マムベットの共感の態度は記されず、涕涙を自ら拒否していることが分析された。涕涙に依拠した共感の意思表示が「感傷の文化」に根ざした白人のデモンストレーションであるのならば、マムベットが示す共感、少女の個性を気づかい、その背後にある「真実の他者」との同一化を回避しながら少女の存在を認めようとするケアの感情であると解釈できる。他者である白人少女と自己をつなぎ、両者の差異を壊すことなく共感の人種的構造を築いたのは、マムベットという黒人女性だったことを検証した。

(4) 文学テキストの「おば」にかんする批評について、おもに次の3点から検討した。①「おば」の語りの基本的な考え方 (Reynolds 2020)、②18 世紀後半から 19 世紀の英国小説の事例 (Perry 2004; Tóibín 2012)、③アンテベラム期女性小説における「母の不在とおばの登場」の背景 (Koppleman 1894; Chambers-Schiller 1984; 1988) である。①については、物語上の「おば」が「父権的な象徴秩序の固定性」から解放され、矛盾を含み、「カテゴリー化や言葉の定義に抵抗する者」として読むことのできる可能性について論じている。②では、18 世紀後半から 19 世紀の英国小説における母親の不在が「女性の本質的な力の欠如」を表し、それに代わる「おば」が主人公の自立や行動をうながす契機となっている「ドラマ的構造におけるおばの価値」が分析されている。③のアンテベラム期における「母の不在」と「おばの登場」については、当時の母親業の規範にたいする不安や恐れがあったことが指摘されている。「おば」とは、「熟達したおば」として、「子どもへの愛情がなく養育能力のない母」と「子どもへの愛情の過多により、育成の目標を見失っている母」の中間に立ち、「本当の母」に代わって「共和国の子どもたちを社会化する」明確な目標を体現した存在である。おばの物語とは共和国市民の育成をめぐるナショナルな不安を映し出したものであり、共和国の理念を背負いながら家庭性の概念を実践する女性であったことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 増田久美子 | 4. 巻 40 |
| 2. 論文標題 「共感」の橋を架け、人種的他者を描く キャサリン・マリア・セジウィックの「mammett」の物語 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 立正大学文学部研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 77-97 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 増田久美子 | 4. 巻 38 |
| 2. 論文標題 沈黙するストウ、雄弁なウェブ 朗読劇『クリスチャン・スレイヴ』をめぐる奴隷制・人種・ジェンダー | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 立正大学文学部研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 37-61 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 増田久美子 | 4. 巻 36 |
| 2. 論文標題 切り貼りされる自己語り セアラ・ヘイルの自伝的記述における家庭性 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 立正大学大学院紀要 | 6. 最初と最後の頁 25-44 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 増田久美子 |
| 2. 発表標題 家庭に「天幕を張る」 ドメスティシティと「おば」の介入 |
| 3. 学会等名 日本英文学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 増田久美子 |
| 2. 発表標題 家庭から市民社会へ アンテペラム期アメリカの家庭性とセアラ・ヘイルの小説 |
| 3. 学会等名 日本アメリカ文学会東京支部（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 増田久美子 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 小鳥遊書房 | 5. 総ページ数 280 |
| 3. 書名 家庭性の時代 セアラ・ヘイルとアンテペラム期アメリカの女性小説 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|